

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284175

研究課題名(和文) 創造的接合知生成のための日常人類学的研究-グローバル言説とローカルな実践

研究課題名(英文) A Study of Creative Articulative Knowledge from a Perspective of Anthropology of Everyday Life : Global Discourse and Local Practices

研究代表者

松田 素二 (MATSUDA, Motoji)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：50173852

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：本目的は、グローバル化の進展のなか世界各地で生起している普遍的な世界基準と個別のローカル文化との間の対立を超越し、両者を接合する知の生成メカニズムを解明することにある。グローバル基準は、確かに普遍的な人権の尊重や地球環境の保全の実現に大きな貢献をなした。同時に先進社会の価値基準の押しつけという批判も生み出した。一方ローカル文化の実践は、土着の知恵への再評価に貢献すると同時に、その土着文化に内包される抑圧が文化の名のもとに正当化されることへの危惧も指摘されてきた。本研究は、生活世界の創造性に依拠する日常人類学的手法によって、両者が葛藤/折衝する現場で具体的に表出する接合知の実相を明らかにする。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to examine the mechanism of knowledge genesis, which can articulate the universal and global standard knowledge system and particular and local cultures. The former type of knowledge has made a great contribution to human development, that is, to liberate individuals from enclosure of modern nation state, to conserve the global environment, and to protect universal human rights. But it is also severely criticized as violent imposition of Western standard. On the other hand, particular local cultures could lead us to reassessment of indigenous values and relativize Western-centrism. However it is subjected to harsh criticism that it demystify exclusion and oppression under the name of cultural relativism. This study has focused on battlefields where two forces interacted and articulated with each other and examined its mechanism from a perspective of anthropology of everyday life world.

研究分野：文化人類学

キーワード：小さな共同体 生活世界 日常人類学 接合知

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降の現代世界の変化の基調は社会のあらゆる領域におけるグローバル化だといってよいだろう。統治形態における民主制、経済システムにおける市場主義という大枠のみならず、価値観からライフスタイルに至るまでグローバル基準は社会の隅々にまで滲透した。人類学においてもグローバル化による世界の一極支配を批判する立場 (Grewal, I. 2008) や逆にローカル文化のロマンティックな賞揚がローカル文化に内在する抑圧構造を温存する点を批判する立場が生まれた (Karen E. 2011)。環境保護や人権尊重などのグローバル基準は、現代世界に生きる人びとが等しく承認すべき指針であると主張する人びとは、人類学者にもその受容を強く要請しはじめた。逆に、標準化の強要が個別文化の価値観を否定すると主張する人びとは、人類学者に土地の土着文化の擁護を求めることになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、グローバル化の進展のなか世界各地で生起している普遍的な世界基準と個別のローカル文化との間の対立を超越し、両者を接合する知の生成メカニズムを解明することにある。グローバル基準は、閉鎖的な国民国家の枠を越えて、普遍的人権の尊重や地球環境の保全の実現に大きな貢献をなした。同時にそれらは先進社会の価値基準の押しつけという批判も生み出した。一方ローカル文化の実践は、個別社会が育ててきた土着の知恵への再評価と近代批判に貢献すると同時に、土着文化に内包される抑圧が文化の名のもとに正当化されことへの危惧も指摘されてきた。この状況のなかで、本研究は、生活世界の創造性に依拠する日常人類学的手法によって、両者が葛藤/折衝する現場で具体的に表出する接合知の実相を明らかにする。

3. 研究の方法

研究の基本的な方法は、「小さな共同体」の「生活世界」のもつ変革・創造に対する豊饒性に着目しながらインテンシブなフィールドワークを実施する「日常人類学的」方法である。それに基づき全体の計画を二段階で構成する。第一段階は、グローバル基準の理念と言説がローカルな実践と交錯する五つの問題の現場を設定しそこにおける両者の接合の様態の解明である。とりあげるのは、環境保全の現場、人権擁護の現場、高齢者介護の現場、紛争解決の現場、希望 (生きがい) 創造の現場という五つの問題生起の現場である。第二段階は、こうした接合知の現象形態が世界各地の「小さな共同体」でどのよ

うに類似しどのように異なっているのかを検討するために、日本、東アジア (中国・韓国)、東南アジア、南アジア、それにアフリカという五つの地域を設定し、そこにおける接合知の様態を比較する。そのうえで接合知に関する一般モデルを構築する。

4. 研究成果

初年度においては、まず接合知に関する問題意識 (グローバル言説の一方的批判ではなくその有効性と限界の両面を抑えること、およびローカル実践のロマン化を避け、その可能性と困難の両面をとらえること) をメンバー全員で各自のフィールドの接合知をめぐる現代と研究の方向性について共有した。それとともに各自のインテンシブなフィールド調査を実施した。その際初年度は、グローバル基準の理念・言説とローカル実践とが交錯する具体的場 (問題発生と対処の現場) を五つとりあげ、そこで生起する絡み合いの諸相と過程を具体的に示した。

それを踏まえて2年目にそれぞれが担当する具体的現場に置いて作用するグローバル基準の言説の応用可能性と困難を同定し、同時にローカル知の問題解決能力の有効性と限界を明らかにした。分担者は、それぞれ担当しているもう一つのフィールドにおいて同じ問題系にかんして比較参照のための調査を実施した。2014年11月には海外からの研究協力者を含めて京都で開催したセミナー

「GLOBAL DISCOURSES AND LOCAL PRACTICES: TOWARDS A CREATIVE AND ARTICULATIVE KNOWLEDGE」において、本研究の特徴である

「グローバルな規範的言説」と「ローカルで創発的運用実践」の接合メカニズムの理論化に関わる、基本的概念、理論枠組を共同で構築し共有することができた。ルワンダの大虐殺のサバイバーの集合的記憶に関わる現場、ネパールの政治的動乱期における環境保護実践に関わる現場、タイのグローバル・ツーリズムに関わる現場、それに韓国・済州島の4.3事件の記憶と真実究明に関わる現場、さらにはケニアの選挙暴動における秩序回復と和解に関わる現場にみられる、二つの力 (グローバル基準の規範的言説とローカルな運用実践) の絡み合いを、総合的に位置づける枠組を理論的に確立したことは大きな成果と言える。最終年には、研究分担者、連携協力者、研究協力者は、その共有された枠組にもとづいてさらなるフィールドワークを実践し、共有された枠組の理論的深化をはかるとともに、新たな知見の有機的連結をはかった。共有された視点にもとづくフィールド調査の成果を、各自がその視点を焦点化する形でまとめたリサーチ・レポートを作成した。それらを連結することで、日常人類学的

方法論の深化を理論化することを目的とした研究成果をまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

1. 松田素二、「国際化対応における人類学者の「ことば」と「文法」」『文化人類学』80 巻 2 号、278-282 頁、2015 査読有。
2. Obvious Katsaura and Toshihiro Abe, Mediated multinational urbanism: a Johannesburg exemplar, *Social Dynamics* (Routledge), Published online (21 Mar 2016), DOI:10.1080/02533952.2016.1158483), 2016, pp. 1-16, 査読有。
3. 伊地知紀子、高正子、藤永壯、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(15・上) : 金慶海さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集. 人文・社会科学編』23 号、225-250、2015、査読無。
4. 伊地知紀子、高正子、藤永壯、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(15・中) : 金慶海さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集. 人文・社会科学編』24 号、163-190、2015、査読無。
5. 伊地知紀子、高正子、藤永壯、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(15・下) : 金慶海さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集. 人文・社会科学編』25 号、99-125、2015、査読無。
6. 内田朝子・白金晶子・角野康郎・古川彰 : 「矢作川オオカナダモ駆除検討会」の記録」、矢作川研究第 20 号、43-52 頁、2016 年 3 月、査読無。
7. 中村律子、「ネパール震災と高齢者ケアコミュニティ・ケアの再創造」『現代福祉研究』第 16 号 177-194 2016 年 3 月 法政大学現代福祉学部 査読無。
8. Motoji Matsuda, 2014. Local Knowledge embedded in Global Discourse: Conflict Resolutions through “African Potentials, in Matsuda.ed. GLOBAL DISCOURSES AND LOCAL PRACTICES: TOWARDS A CREATIVE AND ARTICULATIVE KNOWLEDGE” pp25-32 Department of Sociology Kyoto University, 査読無。
9. 伊地知紀子・高正子・藤永壯「韓国・済州からの渡日史—東回泉マウル調査の事例から」『コリアン・スタディーズ』第 2 号、pp117-131、2014、査読有。
10. 伊地知紀子、高正子、藤永壯、鄭雅英、皇

甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(14・上) 金玉来さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集. 人文・社会科学編』21 号、55-74、2014、査読無。

11. 伊地知紀子、高正子、藤永壯、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(14・下) 金玉来さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集. 人文・社会科学編』22 号、123-138、2014、査読無。

12. 松田素二、「現代世界における人類学的実践の困難と可能性」、『文化人類学』78 巻 1、1-25、2013、査読有。

13. Motoji Matsuda, 2012 Japanese Society of Cultural Anthropology Award Lecture, The Difficulties and Potentials of Anthropological Practice in a Globalized World, *Japanese Review of Cultural Anthropology* vol. 14 pp1-29, 査読有。

14. 松田素二、「地域研究的想像力に向けて : アフリカ潜在力の視点」、『学術の動向』7 月号、日本学術協力財団 62-66、2013、査読無。

15. 阿部利洋、「マンデラの笑顔は問いかける——和解政策というアート」『現代思想』第 42 巻第 3 号、152-161 頁、2013、査読有。

16. 阿部利洋、2014、「弁護士マンデラのプラグマティズムと真実和解委員会」『アフリカレポート』52 号 (アジア経済研究所)、5-9 頁、2013、査読無。

17. Toshihiro Abe, 2013, 'Is Transitional Justice as a Potential Failure? Understanding Transitional Justice based on its Uniqueness,' *African Potentials 2013: Proceedings of International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence* (Center for African Area Studies, Kyoto University), pp. 17-33、査読無。

[学会発表] (計 31 件)

1. 伊地知紀子、「在日済州島出身者の生活史調査から日韓関係を考える」韓国近代学会、嶺南大学校 (韓国、大邱)、2015 年 5 月 9 日 (招聘報告、韓国語) 韓国。

2. 伊地知紀子、「多奈川事件と『消されたマッコリ。』」第 301 回朝鮮近現代史研究会、神戸市立中央図書館内青丘文庫 (兵庫県神戸市)、2015 年 7 月 21 日。

3. 伊地知紀子、「創氏改名～同化政策の歴史と現在」(多民族共生授業づくりセミナー どう教える? 植民地の歴史と在日コリアンの人権) 特定非営利活動法人多民族共生人権教育センター、つるはし交流ひろば ぱだん

(大阪府大阪市)、2015年7月30日。

4. 伊地知紀子、『『消されたマッコリ。』～谷川瓦・「多奈川一級」酒、そして多奈川事件の歴史に学ぶ～』(岬町人権教育研究協議会夏期研修会) 岬町人権教育研究協議会、岬町立多奈川小学校(大阪府泉南郡)、2015年8月4日。

5. 伊地知紀子、「解放後済州島出身者渡日史の形成過程-在日済州島出身者の生活史調査を通して」第12回コリア学国際学術大会、ウィーン大学(ウィーン)、2015年8月21日(韓国語)。

6. 伊地知紀子、「日本人学者がみる在日済州人の生と文化」『慶北大学校グローバル文化コンテンツ創意人材養成事業団』、慶北大学校、大邱(韓国)、2015年9月17日(招聘講演、韓国語)。

7. 伊地知紀子、「在日済州人の歴史と生活」『東アジア共同体講座』、嶺南大学校、慶尚(韓国)、2015年9月18日(招聘講演、日本語)。

8. 伊地知紀子、「韓国海女との親しい交流-済州チャムスの暮らしに学ぶ-」(海女サミット2015 in 鳥羽) 鳥羽将校会議所かもめホール(三重県鳥羽市)、海女サミット実行委員会・一般財団法人自治総合センター、2015年11月6日。

9. 伊地知紀子、「19世紀末以降の済州島から見た生活圏形成と変容-チャムス(海女)の移動と操業実態をとおして-」2015東アジア海洋都市国際学術会議、済州大学校(韓国・済州)、2015年11月26日(韓国語)。

10. 伊地知紀子、『『消されたマッコリ。』～密造酒弾圧事件から地域の在日朝鮮人史を掘り起こす～』第119回 サロン de 人権、大阪市立大学人権問題研究センター、大阪市立大学(大阪府大阪市)、2016年2月20日。

11. 伊地知紀子、「都市移住者のローカルなふるまい-在日済州島出身者の移動史を通して-」釜山大学校韓国民族文化研究所・大阪市立大学都市文化研究センター共催第3回学術大会、釜山大学校(韓国・釜山)、2016年2月20日。

12. Motoji Matsuda, “Towards African potentials for coexistence in urban context” Internatinal Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress Makuhari, Chiba Japan, May 15-18, 2014

13. 松田素二、「紛争解決と和解過程におけるアフリカ潜在力の可能性」、オーラム「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現にむけて」、京都大学(京都市)、2014年5月24日。

14. 阿部利洋、「紛争後社会の和解政策を再考する：南アフリカの事例を中心に」立命館大

学生存学研究センター・アフリカセミナー(京都市)、2014年7月11日。

15. Toshihiro Abe, “Standing by/ for their own feet : African soccer players in Cambodia”, International Conference : Africa and Asia Entanglements in Past and Present, Doshisha University (Kyoto Japan), 2014年7月27日。

16. 阿部利洋、「多元的あるいは緊張をはらんだ社会状況で相互作用を促進する」シンポジウム「文化から日常へ——創造的接合知生成のための日常人類学的研究」2015年3月21日、京都大学(京都市)。

17. 伊地知紀子、「在日済州人研究の課題と展望-「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査」の事例から」第五回済州大学校在日済州人センター国際学術大会、済州大学校(韓国・済州島)、2014年9月18日。

18. 伊地知紀子、「在日済州人の歴史と生活」『慶北大学校SSK多文化とダイアスポラ』慶北大学校SSKプロジェクト、慶北大学校(韓国)、2015年11月17日(招聘講演、韓国語)。

19. Noriko Ijichi, “The cooperation of labor of diving women in Jeju Island, South Korea-Cooperation for whom, and for what?” Inter-Congress IUAES, Makuhari Messe (Chiba Japan), 2014.5.17.

20. Noriko Ijichi, “Imperial Japan and the Migrant Female Divers of Jeju Island in South Korea” Association for Asian Studies (AAS) Annual Conference, National University of Singapore (Singapore), 2014.7.19.

21. 阿部利洋、「移行期正義プロジェクトを報道する難しさ——カンボジア特別法廷に関するローカル・メディアの事例分析」日本社会学会第86回大会、2013年10月12日、慶應義塾大学(東京都)。

22. Toshihiro Abe, ‘Is Transitional Justice as a Potential Failure? Understanding Transitional Justice based on its Uniqueness’ International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence, 2013年10月5日, Center for African Area Studies, Kyoto University (Kyoto).

23. 阿部利洋、「移民集住地区においてコミュニティを創造する——ヨービュール・ニュースの試み」日本アフリカ学会第50回学術大会、2013年5月25日、東京大学(東京都)。

24. 伊地知紀子、「済州島民と解放、4・3、6・25-済州島で生きる人びとと闘うこと-」日本学術振興会日韓共同研究 JSPS「冷戦期日韓におけるアメリカの表象-情報宣伝政策と民衆の対米認識」第1回ワークショップ

- プ、ソウル大学(韓国)、2013年8月3日。
25. 伊地知紀子、「海を越え生野・猪飼野にやってきた一済州島のあまちゃん」「多文化共生を考える」講演会 大阪市生野区地域福祉アクションプラン推進委員会在日韓国朝鮮籍・外国籍住民推進チーム、生野区社会福祉協議会(大阪市)、2013年12月10日。
26. 伊地知紀子、「共生から共感へ：多文化社会への第一歩 - 在日済州島出身者の生活史から考える -」連続講座「東アジアを考える」第I期「大阪から見る日本と朝鮮半島」大阪自由大学(大阪府大阪市)、2013年12月18日。
27. 伊地知紀子、「境界を渡る人びと：在日済州島出身者の生活史から」京都人類学会2月例会、京都大学(京都市)、2014年2月28日。
28. 伊地知紀子、「人と暮らしがつながる韓国・済州島と大阪」大阪市民局 ダイバーシティ推進室人権企画課ネットワーク型市民セミナー、大阪市立難波市民学習センター(大阪府大阪市)、2014年3月15日。
29. 古川彰、「知が生まれる場所」地域資源マネジメント系プロジェクトShDフォーラム、兵庫県立大学、コウノトリの郷公園(兵庫県)、2014年3月7日。
30. 古川彰、「「穴」の来歴」日本生活文化史学会、日本大学(東京都)、2014年9月14日。
31. Akira Furukawa, “What's Articulative Knowledge?”, “Globalization and Local Knowledge III”, Tribhuvan University CNAS & NECRI, Tribhuvan University (Nepal), 2014年3月27日。

〔図書〕(計20件)

1. 松田素二、「アフリカ史の可能性」佐藤卓己編『岩波講座現代5巻 歴史の揺らぎと再編』岩波書店 総ページ288、175-202、2015。
2. 松田素二、「「アフリカ潜在力」の社会・文化的特質」松田・野元共編『紛争をおさめる文化：不完全性とブリコラージュの実践(アフリカ潜在力シリーズ第一巻)』、京都大学学術出版会 総ページ374、1-28、2016。
3. 松田素二、「紛争予防のための潜在力ー現代ケニアのコミュニティ・ポリシングの事例から」松田・野元共編『紛争をおさめる文化：不完全性とブリコラージュの実践(アフリカ潜在力シリーズ第一巻)』、京都大学学術出版会 総ページ374、237-275、2016。
4. Toshihiro Abe, 2016, *Creating Space for Productive Deviance: The Latent Function of the Truth and Reconciliation Commission of South Africa*, in Sam Moyo and Yoichi Mine eds., *What Colonialism Ignored: 'African Potentials' for Resolving Conflicts in Southern*

Africa (Langaa RPCIG, Cameroon), 388, pp. 173-202.

5. Toshihiro Abe, 2016, *Ebb and flow of assemblage in Cambodian NGO movements: Diaspora returnees' human rights initiatives on the Khmer Rouge Tribunals* Chapter four in Shigeharu Tanabe ed., *Communities of potential: Social Assemblages in Thailand and Beyond* (Silkworm books) 270, pp. 85-104
6. 阿部利洋、2016、「創造的な逸脱の許容——南アフリカ真実和解委員会と移行期正義」、遠藤貢編『武力紛争を越える——せめぎ合う制度と戦略のなかで』(アフリカ潜在力シリーズ 太田至 総編集 第2巻)、京都大学学術出版会、総ページ350、211-238。
7. 伊地知紀子、『消されたマッコリ。ー朝鮮・家醸酒(カヤンジュ)文化を今に受け継ぐ』社会評論社、総ページ183、2015。
8. Noriko IJICHI, Atsufum KATO, and Ryoko SAKURADA eds, 2015, *Rethinking Representations of Asian Women: Changes, Continuity, and Everyday Life*, New York: Palgrave, 213.
9. 伊地知紀子、高正子、藤永壯、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩『제일제주인의 생활사 2 고향의 가족, 복의 가족』(=在日済州人の生活史2 故郷の家族、北の家族) ソニン：ソウル、総ページ359、2015。
10. 古川彰監修、『枝下用水史』、風媒社、総頁474、2015年
11. Toshihiro Abe, 2014 “Transitional Justice Destined to be Criticised as Failure: Understanding its Uniqueness from African Cases” Ohta, I. et al. eds. *Conflict Resolution and Coexistence: Realizing African Potentials. African Study Monographs Supplementary Issue 50*, 205pp, pp. 3-23.
12. Toshihiro Abe, 2014 “Standing by/for Their Own Feet: African Soccer Players in Cambodia” Mine Y. and S. Cornelissen eds., *Africa and Asia: Entanglements in Past and Present* (Conference Proceedings, GRM Program, Doshisha University) pp.201-214
13. 伊地知紀子、「国外出稼海女」イ・ソンフン編『海女研究叢書3 歴史学』学古房、ソウル、549-601(韓国語)、2014年12月30日。
14. 松田素二、「現代世界の解釈ツールとしての桜井式ライフストーリー法ー滋賀県・湖西、湖東の調査から」、『語りが拓く地平：ライフストーリーの新展開』、山田富秋、好井裕明編 せりか書房 171-194、2013。

15. 松田素二編、『アフリカ社会を学ぶ人のために』世界思想社、320、2013。
16. 阿部利洋、「アフリカから紛争処理を学ぶ——南アフリカとルワンダの取り組みから」松田素二編『アフリカ社会を学ぶ人のために』、世界思想社、総ページ320、266-277、2013。
17. 阿部利洋、「南アフリカにおける和解政策後の社会統合——カラード・アイデンティティの再構築」佐藤章編『紛争と和解——中東・アフリカの事例から』日本貿易振興機構アジア経済研究所、59-96、2014。
18. 伊地知紀子、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（12・上）—李性好さんへのインタビュー記録—」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』18号、139-157頁、大阪産業大学、藤永壮他7名と共著 編集担当、2013、査読無。
19. 伊地知紀子、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（12・下）—李性好さんへのインタビュー記録—」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』18号、159-176頁、大阪産業大学、藤永壮他7名と共著 編集担当、2013、査読無。
20. 古川彰監修、『枝下用水 120 年史資料集（その2）』豊田土地改良区、1-124、2013年5月。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田素二 (MATSUDA, Motoji)
京都大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：50173852

(2) 研究分担者

阿部利洋 (ABE, Toshihiro)
大谷大学文学部・准教授
研究者番号：90410969

伊地知紀子 (IJICHI, Noriko)
大阪市立大学文学部・准教授
研究者番号：40332829

中村律子 (NAKAMURA, Ritsuko)
法政大学現代社会学部・教授
研究者番号：00172461

古川彰 (FURUKAWA, Akira)
関西学院大学社会学部・教授
研究者番号：90199422

(3) 連携研究者

()

研究者番号：